

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 現代心理学 研究科 映像身体学 専攻				
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	<table border="1"> <tr> <td>在籍研究科・専攻・学年</td> <td>氏 名</td> </tr> <tr> <td>現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程4年</td> <td>小松 いつか 印</td> </tr> </table>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程4年	小松 いつか 印
在籍研究科・専攻・学年	氏 名				
現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程4年	小松 いつか 印				
指導教員	<table border="1"> <tr> <td>所属・職名</td> <td>氏 名</td> </tr> <tr> <td>現代心理学部</td> <td>前田 英樹 印</td> </tr> </table>	所属・職名	氏 名	現代心理学部	前田 英樹 印
所属・職名	氏 名				
現代心理学部	前田 英樹 印				
自然・人文・社会の別	<table border="1"> <tr> <td>自然 ・ 人文 ・ 社会</td> <td>個人・共同の別</td> <td>個人 ・ 共同 名</td> </tr> </table>	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名	
自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名			
研究課題	フリーダ・カーロ・人間身体から植物への擬態-生命の循環-				
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	<table border="1"> <tr> <td>在籍研究科・専攻・学年</td> <td>氏 名</td> </tr> <tr> <td>現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程4年</td> <td>小松 いつか</td> </tr> </table>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程4年	小松 いつか
在籍研究科・専攻・学年	氏 名				
現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程4年	小松 いつか				
研究期間	2014 年度				
研究経費	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はフリーダ・カーロが植物と一体化した自身を描いていたことに着目することで、彼女が自画像を描く理由は生命の循環を提示し＜フリーダ＞を神格化する行為にあったと明らかにしていくことを目的とする。フリーダの絵画は身体から延びる植物を描くことで人間身体の中に在る植物的な生を表している。

フリーダの作品をみていく上で重要なポイントとして、母-子、生-死を描く絵画の中に植物的な生が表されること、そして、フリーダが描くことに向かわせる3つの重要な関心事項として語った「第一は事故の際流れでた自分の血の生々しい記憶、第二は誕生・死・生命の『導きの糸』にたいする思い、第三に母たりたいという願望」に着目する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[フリーダ・カーロ] [植物的な身体] [生命の循環]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

まずフリーダが描く植物と結合した人間身体、またフリーダの絵画に表現されている自然との共存の表れを「植物的身体」並びに「植物的な生」と定義する。1929 年、画家ディエゴ・リベラの妻となってからメソアメリカに伝わる神々やその思想が作品内に多く表れるようになる。しかしながら重要なことはフリーダの表現スタイルは決してディエゴの模倣に留まることはなく、やがてフリーダの絵画の中心となった痛みを抱えた身体というテーマは産み出すものとしての痛み、則ち生命の母へと変化する。フリーダがはじめて植物と人間の身体を一体化させたモチーフを描いたのは、1931 年の《ルーサー・バーバンク》においてである。この年ディエゴは《カリフォルニアの寓話》と名付けられるフレスコ壁画を描いており、この作品の中にルーサー・バーバンクも登場している。この時点でフリーダの絵画の主題はディエゴからの影響を大きく受けていることが伺える。しかしながら、ここで重要なことはディエゴの作品がカリフォルニアの自然や文化、壮大な物語と歴史が描かれるのに対し、フリーダの視点は常にルーサー・バーバンク博士という一人の人間の物語に向けられている点にある。フリーダの絵画は一人の人物の現実を忠実に描くことでその身体と共存する世界を表すことに成功する。この作品の他にもフリーダは自身の身体から根を生やした姿を描いている。このような植物と連結した身体の姿はメソアメリカに共通の概念である世界樹の思想を思い起こさせる。まず、世界樹の思想において重要な点は天と地の異なる次元を 1 つの身体の内に持っていること、そして、人間の存在するこの場も地底世界から天に向かう神々の力と天から落ちる神々の力とがぶつかりあう過程にあり人間は他の生物と同様に神々の力の一連の運動の中に在るという解釈が出来る点にある。この思想は現実が神々の力と常に触れ合う世界にあることが示されている。フリーダは植物と連結した身体を描くことで、人間の身体もまた生命の力を内包した存在であるということを描いている。

1. フリーダの絵画と民衆の奉納画の違い

世界樹の思想から導かれる現実の思想はメキシコの民衆が描く奉納画にも表れている。奉納画を描く人々は描くことで惨事からの救済を得る。このことから、人々は現世界が神々の通り道の中にあり人間もその力の一部であることを体現していると考えられる。フリーダも多くの作品で奉納画の手法を用いていたが彼女の作品は決定的に他の奉納画とは違う性質を持つ。それは奉納画を納めた人々が描いた時には既に救済を得られているという事実に対して、フリーダの絵画に表された苦痛は神からの救済を得ることなく続いている点にある。このような自身の苦痛を作品に表し痛みイメージを描き続けるフリーダの行為は人々が奉納画において神々の力を表したもののよりも更に深く永続的な神々の世界との繋がりを表している。

2. フリーダが描く母-子

フリーダが絵画を描くことの重要なテーマとして掲げた 3 つの関心を明確に示した作品としてフリーダ独特の母子像がある。1932 年、フリーダはディエゴとの子供を流産しその 2 ヶ月後に母親を亡くしている。この年に描かれた《フリーダと流産》では作品の中心に裸体のフリーダが在り、フリーダの身体は中央に引かれた線によって左右に分かれている。フリーダは涙を流し、陰部からも雫が滴り落ちる。この雫は土の内部を湿らせ地上の植物を育てている。更にフリーダの左手は 2 本描かれており、一方の左手には心臓の形をしたパレットが握られている。フリーダは 1932 年以降このような心臓を模したパレットを度々描く。心臓は生命の源となる器官でありメソアメリカの供犠の思想において重要な価値を持つと考えられていたことから、もう 1 つの左手は彼女にとって描くという行為そのものが神聖な供犠の儀式であることを示していると考えられる。また鑑賞者からみて画面の左側には細胞の形成から始まる胎児の成長過程が示され、その下に大きく成長した胎児が描かれている。この成長した胎児は中央に置かれたフリーダの子宮内の胎児と繋がっており、フリーダに宿った胎児の成長過程を示していることがわかる。以上のことからフリーダは作品の中に流産を経験したフリーダを表し、また同時に死が再び別の生命へと導かれる姿を描くことで自身の肉体の痛みから解放されると考えていたことがあげられる。

研究成果の概要 つづきまた、1937年に描かれた《乳母と私》における乳房にはその内部に流れる乳腺が描かれている。房の内部には多数の乳管と小葉によってつくられる流動線が延びる。この流動を含む乳房は人間身体の内部にある植物的な生を明らかにするものである。また、他から与えられる乳房を描いた場面からは、メソアメリカに伝わる死に関する信仰を当てはめることが出来る。この絵画から想起されるのは、死んだ乳飲み子が向かう死者の世界の1つとされる「乳母の樹の場所」である。乳母の樹は乳房を果実として実らせ死んだ乳飲み子はその果実から滴り落ちる乳を飲む。この赤ん坊たちだけが唯一、この世界に再び戻ってくることで出来る死者であり、再び母親の腹に宿る時を待っている。このようにして、乳母の樹は植物の姿をとりながらも死を経験した生命に再び大きな恵を与え、この世へ戻すことで出来る創造の母なる存在である。フリーダもまた《乳母と私》において植物的な生を内包した母としての〈フリーダ〉を表し、同時に死と共にありながらも再び生まれ出ようとする乳飲み子としての〈フリーダ〉を描く。このことから、この作品は死と誕生の場面を同時に描いていることが明らかになる。このようにして、フリーダは植物的な生に導かれる生命の循環を抱擁する母-子の姿に表していると考えられる。フリーダによる母-子の絵画にはフリーダを育んだ母の記憶を遡る事で生命の母が表れ、その乳液によって育まれる乳児は大地に生まれでた全ての人間の始まりの姿であることが示されている。

3. 生命の抱擁による山の形成

1942年に描かれた《愛は抱擁する、宇宙、大地（メキシコ）、ディエゴ、私、セニョール・ソロツルを》は抱擁する母-子の姿がやがて生命の循環を表す山＝ピラミッドの姿へと変化した作品である。作品の中心に描かれているのは〈赤子の姿をしたディエゴを抱くフリーダ〉と彼等を抱く〈植物的なフリーダ〉そして、それら〈全てを包み込むフリーダ〉という抱擁の連鎖である。作品に表れるフリーダ＝母による抱擁の連鎖には、太古から続く大地という過去、テワナ衣装を着るフリーダという現在、ディエゴの額に描かれた第三の目の見据える未来という時空間が共存している。これらのモチーフは円錐形に配置され、その姿はメソアメリカ思想の創造において重要な山＝ピラミッドを連想させる。時空間の形成を古代メキシコ人は山をモチーフにした建造物であるピラミッドによって表しており、ククルカンの神殿のような暦の周期が完了した事を祝う場所としての役割を持ったピラミッドは「周期ごとに、既存のピラミッドを壊さずに、もう一回り大きなピラミッドを古いピラミッドを包むように建設し」ていた(加藤薫『ディエゴ・リベラの生涯と壁画』岩波書店、2011年、523頁)。このようにして、周期ごとに建設されるピラミッドは常に過ぎ行く時代を幾重にも内包している。このことと同様に、フリーダの絵画に表れる母-子、生-死という生命の循環もまた、線的に連なるものではなく内包によって常にある層に含まれ、含んでいる。フリーダによって植物的な抱擁の連鎖はやがて集合体である山の姿へと導かれていく。フリーダの絵画は個人の痛みを描く事から始まる。この個人の痛みは則ち、それだけで人間の痛みであり、人間は母なる存在の内に常に含まれている。彼女の絵画に表れているのは常に何かに内包されながら自らも創造に関わる生命の循環である。また、本研究で示されたフリーダによる生命の循環についての思想は、1945年に描かれた《モーゼ》における死と誕生の場面においても同様に表されていることを明らかにした。

結論

フリーダが描く自身の身体は植物へと擬態しているが、それは身体から伸びる根を描いたものに留まらず乳房の内にある乳腺、乳管と小葉に至るまで詳細に描く事で人間身体を形成している植物性を露にする。フリーダが作品に描く自身の身体は植物的な生との繋がりを強く表し、この植物的な繋がりが生命の循環を示唆するものである。また、彼女が自画像を描く理由は生命の循環を提示する事でフリーダという一生命を神格化し、死と隣り合わせにあった彼女の肉体を永遠のものとするという行為にある。この、フレーム内に表されたフリーダは世界の中心である世界樹の内部へと向かうための道となる。それは、絵の中の世界と現実世界とを葉脈を介して地続きにする植物的な思想であった。この互いに繋ぎあう世界が、フリーダの主張する現実である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 小松いつか、「フリーダ・カーロ-人間身体から植物への擬態-生命の循環-」、『立教映像身体学』、第 3 号、2015 年、28-51 頁。